
自由への誘い

yoichi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

自由への誘い

【Nコード】

N2573D

【作者名】

y o i c h i

【あらすじ】

いつもの朝、突如犯罪に巻き込まれた男の、苦悩と葛藤の二日間。時間と共に追い詰められていく男と、それを仕組んだ男との対峙を軸に、サスペンス風に綴った作品です。

始まり

朝の通勤ラッシュ。地下鉄のホームに男は降りた。新調したスーツに身を包み、さつそうと構内を闊歩するその姿には自信が満ち溢れていた。改札を出ていつもどおりの通路を進み、壁に沿ってうなだれているホームレス達の姿を横目に出口へ向う。

「新入りが何人かいるな。困ったものだ」

十分に距離をとるまで歩き、小さな声でそう呟くと、男は唇を歪めて笑った。

男が勤める会社は反対側の出口から出た方が近い。わざわざ遠回りする理由はホームレスがいる只中を通る為だ。社会の落伍者であるホームレスを眺め、自分の優位性を確かめるのが彼の日課だった。階段を上り地上に出ると、男は大きく息を吸った。そして、数分前の歪んだ笑顔とは明らかに違うさわやかな笑顔を浮かべた。彼は今日から新しい部署へ配属され、その全てを任される。念願の部長昇進だった。これまでの苦勞が報われる記念すべき日だ。

男は会社への道を歩きながら、これまでの苦勞を思い返していた。同期で入社した者たちの中には、瞬く間に昇進していった者や、既に独立して成功した者もいる。決して優秀ではないと自覚はしていたが、悔しい気持ちを抑えて懸命に耐えてきた。こつこつとそして真剣に会社に貢献してきたことを認められたことが何よりも嬉しかった。ようやく同期の仲間たちと引け目無く酒を飲める。苦勞をかけてきた妻にも少しは樂をさせてあげられるだろう。

男は交通量の多い通りから、小さな脇道に入った。遠回りしてし

まう距離を少しでも縮めるために、いつも選択している道だ。

その小さな通りの中ほどで、男は落ちている携帯電話に気が付いた。

「落し物か」

拾い上げて二つ折りのその携帯を開いた。電源は入っていない。

男は少し迷って電源を入れてみた。

爆発

次の瞬間、ドン！ という大きな音と共に地面が激しく上下した。地震だと思った男はその場でしゃがみこんでしばらく様子をうかがった。しかし、衝撃は断続的に起こり続け、あきらかに地震とは異質なものに感じられた。地下が連続で爆発しているような奇妙な感覚が一分ほど続いた後、ようやく地面の揺れは治まった。完全に治まったことを確認しながら男はゆっくりと立ち上がると、周囲を見渡して状況を把握することに努めた。すると、大通りの方向から悲鳴や怒号が聞こえてきた。

男は警戒しながら脇道の入り口へ戻り、けたたましくクラクシヨーンが鳴り続ける方向を見た。

そこには異様な光景が広がっていた。駅前についても混雑する大通りが広範囲に陥没し、その穴に多くの車が飲み込まれていた。いたるところから黒い煙が立ち昇り、地下の出口からはやはり大きな煙とともに、むせながら脱出してくる無数の人々が見えた。

男は呆然とその様子を見ていた。何も行動を起こすことができなかった。目の前に広がる惨状を理解することができずにただ立ち尽くしていた。

電話の男

呆然とする男を我に返したのは、いきなり右手に感じた細かい振動だった。驚いて右手を見てみると、さっき拾って握ったままだった携帯電話が振動していた。なんの飾り気もない着信音が同時に鳴っている。

男はなんとなくボタンを押して、何も考えずに携帯を耳にあてた。「おはよう」

知らない声が聞こえた。男はなお目の前の惨状を見続けながら電話に応えた。

「あ、あの、これは落とし物で……、それより今、 駅が大変なことに……」

さまざまな音のサイレンが四方から鳴り響く中、男は受話器の向うから聞こえる笑い声に気付いた。

「ククク……。ああ、大変な状況だな」

嘲りを含んだその言葉に、男は何か異様なものを感じた。

「あんだ、笑ってるのか？ 本当に今の状況がわかってるのか？」

「失礼失礼。不謹慎だったよ」

男は気を取り直して電話の相手に聞いた。

「あんだ、この携帯の持ち主か？ それだったらこれは近所の交番に届けておくから後で取りに行けばいい。……しかし、これは一体何ていうことだ」

男にとって、落とし物の携帯を拾ったことなど今は些細なことだ。それよりも目の前の状況が何なのか理解することで精一杯だった。そんな男の関心をもう一度呼び戻すように、電話の男は意外なことを言い出した。

「携帯は届けなくていい。わざと置いたんだからな」

「……置いた？」

「あんたが拾うことを予想してそこに置いたんだよ」

唐突な言葉に男は戸惑った。電話の男の声に聞き覚えはないのに、まるで自分を知っているような口ぶりだった。

「何を言ってるんだ。あんたは誰なんだ？ 俺には全く心当たりがないんだが」

「……、そうだろうな。あんたは俺のことを覚えていないだろう。そんなことよりも、知りたくないのか？ 目の前の惨状の理由を」

男は不吉なざわめきを感じて聞き返した。

「あ、あんた……、この事故のこと何か知ってるのか？」

「事故じゃない。俺が計画したんだ。その地下鉄の爆破をな」

スイッチ

男はあまりに唐突な話の展開にますます訳がわからなくなった。

いつもどおりの朝、突然地下鉄が爆発し、拾った携帯にかけてきた男が自分の犯行だと言い出した。しかもその男は携帯をわざと自分に「拾わせた」と言う。グルグルと回る男の思考は様々な事象を繋ぎあわせることはできなかったが、この状態がどうやら歓迎すべきものではないことだけは感じとれた。

「……冗談を言ってるのか？」

「冗談などではない。少々爆発の規模が大きかったことを除けば全て計画通り進行している。一番心配していた、あんたを巻き込むということにも成功した」

「巻き込む？ 何の話だ？ あんたがこれをやったとして、それを俺に話すことに何の意味があるんだ？」

「……一つ言っておくが、巻き込むと言ったのは、あんたとお話しをするって意味だけじゃないんだ。あんたを犯罪に関わらせたって

意味もあるんだよ」

「関わらせた？ …… どういう意味だ？」

「あんた、その携帯の電源を入れただろ」

「ああ、それがどうしたって言うんだ？」

「その携帯の電源を入れること、それが爆発のスイッチなんだ」

電話の男は淡々とそう言った。それを聞いた男はやはりすぐに理解することができなかつた。だから確認せずにはいられなかつた。

「……嘘だろ？」

「嘘じゃない。その携帯の電源が入れば地下鉄に仕掛けた爆発物のセンサーが感知して爆発する、そう設計したんだ。リモコン爆弾みたいなもんだよ。あんたはまんまとその携帯を拾ってみごとに電源を入れた。まさに計画通りだ」

人でなし

電話の男の言葉に冗談は感じられなかつた。目の前の惨劇を引き起こしたのは誰であろうこの自分だと当たり前のように説明され、男は周りの音が遠くなるような感覚に襲われた。しかし携帯電話から聞こえる声だけは鮮明だつた。

「驚くのも無理はない。あんたの知らないところで計画したんだからな。それよりどうだい？ 自分の親指が大勢の命を奪うきっかけだつたことを知つた今の感想は」

目の前の惨状と自らの激しい動揺をよそに、電話の男の口調は相変わらず冷静だつた。男はそれが無性に腹がたつた。

「ふざけるなっ！ 何か計画だ！ 何がみごとにだ！ それが本当だつたとしても、お前が勝手に仕組んだことだろ？ 俺には何にも責任はないじゃないか！ 自分が何をしたのかわかつてるのか？

ここに来てどれだけの被害があつたのかその目で見てみる！ お

前のお遊びが引き起こしたその結果を！」

「全て見ているよ。この惨劇も、それを前にして何もできずに立ち尽くすあんたの姿も」

男はあわてて周囲を見渡した。しかしそれらしい男の姿を確認することはできなかった。

「残念ながらそつちからは俺をみつけることは難しいだろう」

「なるほど。自分が仕組んだ犯罪を安全なところから見物してらつてわけか。人を人とも思っていない犯罪者に似合いの趣味だな！」

「人を人とも思っていない、か……。あんたが非難できる立場かどうか、やはりわからせてやる必要があるようだ」

電話の男の声は変わっていない。しかし、何か異質の冷たいものを感じさせた。

「……何のことだ？」

「そろそろ話そうか。この犯罪の理由を」

犯行の理由

「理由？ どんな大層な理念や信条があるのか知らんが、お前は最低最悪のテロリストだ！」

この世に許される犯罪などない。そんな通り一遍等な考えをもとに、男は電話越しに犯罪者を糾弾した。しかし、返ってきた言葉は意外なものだった。

「これはテロではない。私怨だ」

男は言葉を失った。目の前の惨状を見て、何らかのテロであると思いついていたからだ。被害の規模の大きさと私怨という言葉のギャップに思わず笑いがこみあげそうになった。次に口を開くまで少し時間がかかった。

「私怨だと？ そんなことのためにお前は……」

「そんなこと、のあらしを今から話そう」

電話の男は犯行の理由を話し始めた。

「四年前の今日と同じ日付、俺はあの地下鉄の駅舎に数人の男に拘束されて突き出された。通勤途中、目の前にいた女子高生が俺を睨みつけて痴漢されたと騒いだ為だ。もちろん俺は痴漢なんかやつちやいない、濡れ衣だった。俺はろくな抵抗もできずに逮捕された。裁判では冤罪を訴え続けたが結局有罪判決を受けた。執行猶予三年だった。俺は控訴しなかったよ。早く元の生活に戻りたかったからな。しかしそれは間違いだった。俺は全てを失っていたんだ。妻も子供も俺を見限っていた。会社もクビ。もちろん退職金も出ない。それどころか、くすぶっていた帳簿操作の責任を全て俺に押し付けておまけ付きだ。確かに不正な経理に俺は携わっていたが、それは上司の指示があったからだ。逮捕されたのを機に俺に全ての罪をかぶせたって訳だ。この前、その会社が上場の発表をして、社長が大層な経営理念をほざいてたが笑えて仕方なかったよ。結局、俺は詐欺容疑で逮捕され実刑をくらった。裁判では全く争わなかった。思うところがあってな。そして一年前、俺は出所した。それから、今日の日を夢見てひたすら情報収集と作業に打ち込んだ。刑務所の中ですっと計画していたことを実現させるためにな」

電話の男の声は変わらずに冷静だったが、湧き上がる感情を抑えるようでもあった。

話す理由

当事者にとっては切実でも、これほどの犯行の理由としてはいささか情けない恨み節に、男は共感することができなかった。

「それを恨んでの犯行ってわけか。話をそのまま信じれば確かに気

の毒だと思うが、だからと言ってこんなに大勢の人を巻き込むようなことをしていいわけないだろう」

「別に理解してほしいわけじゃないさ。ここからは、あんたにこんなことを話すその理由について話そう」

男の背中にこれまでに何度か感じた不吉な雰囲気広がった。

「電車内で取り押さえられたあの瞬間のことを俺はあまり覚えていなかった。なぜ、すつぱりその瞬間だけが記憶にないのかもわからなかった。ただ、ひどい悪寒を感じたことだけは覚えていた。その悪寒の正体は何だったのかを知りたくて、俺は出所後同じ時間、同じ車両に乗り込んでみた。車内ではその悪寒の正体はわからなかったが、西口へ続く通路で俺ははつきりと思い出すことができたんだ」

「……西口？」

「そう、遠回りになるのにも関わらず、あんたが毎朝通る西口だ。あの時、確かに感じた激しい悪寒の正体はある一対の視線だったんだ。……新聞にくるまって寝ているホームレスを見下ろしていたあなたの目。それを偶然見た瞬間、俺は再びあの時の悪寒に襲われたよ」

男の背中に垂れ込めていた嫌な雰囲気は、確実な冷気に変わっていた。この電話の男は自分の日課を知っている。そしてその日課の意味するところも知っている。他人に最も知られたくない自分の黒い部分をピンポイントで指摘されたようで、男は動揺し口を挟むことができなかった。

「あの日あの時、あんたは俺と同じ車両に乗っていた。そして取り押さえられる俺を見ていたんだ」

男は記憶をたどった。確かに自分が乗り合わせた車両で何度か痴漢騒ぎがあったのは覚えている。しかし、その中の一つを見ていたことが巻き込まれる理由になるなんて納得できなかった。

「そんな理由で俺を巻き込んだって言うのか？ 別にあんたを取り押さえたいわけじゃない。ただ見ていただけで？」

「……そう、」ただ見ていただけだよ。あの瞬間、すぎるような

気持ちで周りを見た俺は様々な視線にさらされているのに気付いた。侮蔑、嘲り、怒り、哀れみ、嫌悪……。そんな中でただ一つだけ、何の感情も伴わない視線があったんだ。まるで道端に転がっている蛙の死骸を見るようなあんたの視線がな」

「……………」

「通路にいるホームレスの一人と話してみたんだ。あんたの事、あそここの連中はみんな知ってたみたいだよ。あんたが通路に来るたびに寒気がするそうだ。そして、あんたと視線が合った時、俺と全く同じ心境になったそうだよ」

「心境……?」

電話の男は少しだけ間をおいて、一層低い声で言った。

「絶望、だよ。自分よりも低い立ち場の者を見るあんたの目は、その相手に絶望を与えるんだ。まるで自分が人間未満の存在であるかのようにな」

自分の目の想像だにしない効果に驚いて声も出ない男をよそに、電話の男は話を続けた。

「取り押さえられた時のことをほとんど覚えていなかったのは、あんたの視線のおかげで自分自身に深く絶望したからだ。逮捕当時、俺は無気力に取り調べに応じていたが、それが後の判決に影響した。当初はおとなく犯行を認められていた、と判断されてしまったんだ。まさか他人の視線で自らを絶望し、うなだれていたのがその理由だなんて、本人にしかわからないからな。無気力になってしまった理由を出所するまで思い出せなかったのは自分でも情けないが」

「お、俺は他人をそんなふうに思ってたんか……………」

「あんたがどう思ってたようが関係ない。受け取る側の問題だ。同じ想いをしたよしみで、ホームレスたちにはこの時間は地下から出たほうがいと伝えてはいたが、本当に避難したかどうかはわからない。もつとも、全てのホームレスが死んでしまっていたとしても、あんたは何とも思わないだろうがな」

辛辣な言葉が男の胸に容赦なく突き刺さり、全く自覚することが

なかつた己の罪に戸惑った。俺の目はそんなに人を傷つけていたのか、それほど冷たい目をしていたのか、……と。

家族

「俺はあんたを偶然見つけてから、あんたのことを詳細に調べ上げた。生い立ちから現在の会社での評価、そして家庭環境までもな」

家庭のことを口にされ、男は震える声をあげた。

「おい！ 俺の家族まで巻き込むつもりか！？」

「安心しろ。そんなつもりはない。あんたを巻き込んだ時点で家族にも影響はあるかもしれないが、直接何かをすることはないさ。しかし、あんたみたいいな人でも家族は大事なんだな」

「当然だ。家族は俺の全てだ」

「……そうか。しかし、そう思ってるはあんただけかもしれないぜ」「どういうことだ？」

「あんたの奥さん、離婚の準備を進めている」

思いもよらない方向からの新たな衝撃に、男は耳を疑った。

「……なんだと？」

「何が不満で別れたいのかまではわからないが、弁護士に頻繁に相談をしているようだし間違いはない」

「嘘をつくな！」

「信じたくない気持ちはわからんでもないが、最後に奥さんと目を合わせたのがいつだったか考えてみればいい。もし遠くまで記憶を遡らなければならぬなら、奥さんもあんたの目の被害者かもしれないな」

男には確かに思い当たる節があった。ここ数年、妻との会話はおざなりなものに終始していたし、女性として扱うこともほとんどなくなっていた。電話の男の言葉は、確実に男の中の何かをむしりと

った。男は支えるものが失われていく感覚を覚えて今にもへたりこんでしまいそうだった。

偽りの出世

電話の男はなおも口撃を止めようとしなかった。

「もう一つ、ついでに教えといてやると……」

「もういい！ でたらめな作り話はもうまっぴらだ！」

「聞きたくなければその携帯を捨てればいいだろう。勝手に続けるぞ。あんたは今日から新しい部署に配属されるんだったな。その新しいスーツを見ればあんたの意気込みも伝わってくるが、残念ながらそれは無駄になるだろう」

「……適当なことを言うのもいい加減にしろ」

「あんたの会社の内部報告制度って知ってるだろう？ あれは表向き、現場の意見を直に経営陣に届けるための匿名意見箱ってことになってるが、実際はリストラ候補を選別するための貴重な情報源なんだよ。小さなセクハラやパワハラなんかの、表に出にくい勤務態度を社員同士で告発させる、逆人気投票みたいなもんか」

「そんなことは社員なら誰もが知ってる！ それがどうしたっていうんだ！」

「あんた、よつぼど部下や同僚に嫌われていたみたいだな。あんたのその目で嫌味の一つでも言われたら嫌いになるのも当然だろう。ぶっちぎりのトップ当選だったみたいだよ、逆人気投票」

「……そ、そんなことがあるわけない」

「その結果、めでたく新部署へ配属となったわけだ。そして、その新しい部署ってのは、実は意見箱の集計結果でリストラ要員に挙げられた者を集めた『最終処分場』なんだよ。あんたはそのやっかい者たちの筆頭ってわけだ」

「ふざけるな！ 何でそんなことがお前にわかるんだ！？」

「現代の刑務所は傷害や窃盗で捕まったやつばかりじゃない。コンピュータを使った知能犯もいるんだ。そんなやつらと知り合うには非常に良い環境だ。人材を得るには事欠かない」

「……ハッカー？ そいつらを使って会社のコンピュータに侵入したってことか？」

「あいつらは好奇心が異常に強い。面白い覗き先を提供すればすぐに情報を取ってきてくれたよ」

男は辞令を受ける際に上司から言われた言葉を思い出した。

新規事業を展開する上で非常に重要な部署になる。君のがんばり如何によつてわが社の命運が左右されるだろう。癖のある者の中にはいるだろうが、それらをうまくまとめがんばってほしい。新しい事業を展開する体力が本当に会社にあつただろうか。それほど重要なポストになぜ俺なんかが任命されたのだろうか。全てがリストラの体裁を整えるための準備だとすれば……。出世は認められた結果なのだ。素直に喜んでいたさっきまでの自分を、男は心から愚かに思えた。

二つ目の計画

「調べているうちについつい気の毒に思えてきたよ。それでも俺の復讐を止めるまでにはいたらなかったがな」

この短時間の間に男の人生は全て否定された。仕組まれた殺人教唆、家族の崩壊危機、リストラの疑念……。その原因は全て自分身だという。つい今しがたまで希望に満ち溢れた朝だつたはずが、今はもう男には何もすがら物がなかった。

「俺はあんたに死よりも大きな苦しみを与えることを考えた。あの爆発で死んでいった者たちはあんたに十字架を負わすための犠牲だ。

それだけのために死んでいったんだ。爆発のスイッチを押させたのはたんなる儀式程度の意味合いしかない。あんたのためだけに大勢の人間が死んだ。その事実があんたを一生苦しめ続けることになる。これまで長々と話した理由はそれをわからせるためだ」

打ちのめされた男に答える気力は残っていなかった。電話の男の言葉一つ一つが自分自身を破壊していく。その時、心を切り刻む力ミソリのような言葉の数々が、男にある疑問をもたらせた。

「ちよつと待て。さつき、刑務所の中で計画していた、と言ったよな？ それだつたら辻褄が合わない。俺を偶然見つけたのは出所後だと言った。なら、務所の中で俺に復讐する計画なんかできるはずがない。何があんたに悪寒を走らせたのかさえわからなかったんだからな」

精一杯強がつて放った言葉は、あっけなく振り払われた。

「刑務所の中で計画していたことはこれとは別のものだ」

男の必死の抵抗は、隠されていたさらなる悪夢を引きずり出すという結果になってしまった。

「別のもの？ ひよつとして、他にもまだ何かやるつもりなのか？」

「それはあんたには関係のないものだが……、まあいい、少しだけ教えてやる。俺には復讐する対象がもう一つある、それだけしか言えない。それじゃあ、そろそろ話はおしまいだ。切るぞ」

謝罪

.....

新展開と思いきや突然の終了宣言。男にしてみれば、ここまで貶められた手前、「関係ない」で済まされるわけにはいかなかった。

「ふざけるな！ 俺には事態の顛末を知る理由がある！ それに他にも何か計画があると知った以上、お前を止める義務もある。まだ犯行を重ねる気か？ まだ殺したりないっていうのか？」

「数の問題じゃない。それに、あんたには関係のない話だと言っただろう。それとも、さらに深く犯罪に関わりたいたでもいうのか？」

電話の男の言葉はもつともだった。これ以上関わっても事態が好転するわけがないのは男も肌で感じている。しかし、男は電話を切ることに抵抗があつた。電話を切った瞬間、確定してしまうような気がしたからだ。己の罪に苛まれる、泥沼のような人生が。

「とにかく、あんたに関わる計画はこれで終了だ。せいぜい、自らを呪いながら生きていけばいいさ」

「ちょ、ちよつと待て！ これまでの話でお前のことを色々と知ることができた。俺が警察に通報すれば、すぐにでも身元が割れるぞ。完全犯罪を目論んでいるのなら、それは無理な話だ。お前は調子に乗って喋りすぎたんだ！」

「フッフ……、心配には及ばない。俺の計画は完璧な形で完結するよ」

電話の声にうるたえた様子はうかがえなかった。あれほどの爆破をやつてのけたのだ。もう一つの復讐も完璧に果たす自信があるのだろう。とり残されようとする男にできることは一つしかなかった。「頼む！ もう犯罪を繰り返し返さないでくれ！ 俺があんたを傷つけたのなら謝る。悪かった！ だからもう他人を傷つけないでくれ！」

男の悲痛な叫びに対して、しばらく反応がなかった。

「もしもし！？ 聞いているのか？ なんだったら目の前で土下座してもいい。だから、俺なんかのために犠牲者を増やすようなことはもうやめてくれ！」

ずいぶんと間をとつて、ようやく電話の男は口を開いた。

「……、まさか、あんたが謝るなんて思わなかったよ。本当に予想外だ。今は素直にあんたの謝罪を受け入れることはできないが、あんたと事前に話すことがあれば、復讐の内容も違っていたかもしれないな……」

これまでの電話の男の声とは明らかに様子が違っていた。真剣に

電話の男にとって、男に対しての関心は復讐心で構成された怒りのみだった。その怒りが薄れ始めた今、執着する必要も同時になくなっていた。

「そういうわけで、俺は次の行動に移る。あんただけに構ってるわけにはいかないんだ。これからあんたがどのような行動をするかは知らんがせいぜい頑張ることだ。想像していたものとは少しずれたが、話せてよかったよ。じゃあな」

そう言い捨てて、電話は切れた。突然巻き込まれて、突然飽きられて放りだされた男は、なんとも所在無い気持ちになった。何か行動しようにも何をすべきかわからない。目の前ではレスキュー隊などによる救助活動が続いているが、男は動くことができなかった。何かしら行動すべき状況だと感じてはいたが、阿鼻叫喚を極める現場に近づくことが怖かった。

「俺にどうしろって言うんだ……」

爆破のスイッチを入れたのが自分だということに気がして、というわけではなかったが、この犯罪の裏側を知ってしまった以上、純粹な気持ちで救助活動に加わる事ができなかった。男は、自分もこの犯罪の関係者なのだと、ある部分で認めてしまっていた。電話の男の計画どおり、この犯罪に完全に引きずり込まれている自分に気付いて男は愕然とした。

男はもう一度話すために、携帯の着信履歴を見た。しかし、何故か一件の履歴も残っていないかった。携帯をたたんだ男は、これまでの会話を反芻するように目を閉じた。しばらくして目を開けると、男は野次馬などでこつた返す歩道を走り始めた。予想される新たな復讐の見当がついたためだ。

復讐の対象

男は走りながら何度もさっきの会話を思い返していた。

俺があいつの立場だったら、最も憎いのは勤めていた会社だろう。痴漢扱いした女子高生や取り押さえた男たち、見捨てた家族も恨みの対象になるかもしれないが、それらに対しての復讐ではないような気がする。あいつも俺と同じ、仕事人間だったんじゃないだろうか。会社に裏切られたその気持ちは誰よりも理解できる。そして、その会社は……。

電話の男が残したヒント、それは犯罪に至った理由を話していた中に含まれていた。最近、上場して会見を開いた会社。男にはその会社に心当たりがあった。一時期経営が行き詰まりながらも、復活して上場を果たした奇跡的な会社として、マスコミにもよく取り上げられたからだ。その社長は独善的な経営手法で有名だったし、自ら表に出るのを好んだ。男の会社でもその会見の内容が話題に上ったくらいだ。もう一つ、その会社に目星をつけた理由は、この地下鉄沿線の二駅先にその会社の本社があるためだ。この地域には上場している企業は少ない。上場の時期も考慮すればその会社に間違いないと思われた。男は警察に電話することも考えたが、今は地下鉄の件で総動員がかけられているのは容易に想像できたし、仮に聞いてくれる者がいたとしても、自分の話を理解し早急に対応してくれるとは思えなかった。対象と思われる会社に電話したとしても同じだろう。いたずら電話だと思われるのが関の山だ。

男はその会社へ急いだ。しばらくぶりの全力疾走だった。四十を越えた男にとって、その突然の運動ははかかなり辛いものだった。大量の汗を滴らせ息を切らしながら走る途中、サイレンを鳴らしたまま渋滞に捕まっている緊急車両を何台も見ることができた。さらに、上空を行き交うヘリコプター群を見るにいたって、男は自分が関わってしまった事件の大きさを改めて感じた。

現場はどうなっているだろうか。死者は何人なのだろう。俺は罪に問われることになるのだろうか……。そういえば、入社する途中

だった。会社は現場に近いが混乱してないだろうか。ひよつとしてあの爆発に巻き込まれた者もいたかもしれない。……俺の安否を気遣う連絡がないのはどういいうわけだろう。会社からも女房からも携帯に連絡があつてよさそうなものだが。電話の男の言つとおり、俺は誰からも必要とされてないんだろうか……。

様々な考えが頭をよぎるが、そのどれもが男にとつて辛いものだった。それらを振り払うように男はネクタイを解いて後ろに放り投げた。男を動かしているのはただ一つ、新たな犯罪を止めることによつて失われようとしているものを取り戻すという、ほんのわずかな希望だった。

到着

男が目指す会社へ到着したのは、走り始めてから約二十分後だった。息を切らし、背広をくしゃくしゃにして小脇に抱え、おぼつかない足取りで玄関を通るとまっすぐに受け付けに向つた。フロアにいた誰もが怪訝な表情で男を見ていたが、男は気にすることなく受付嬢に話を切り出した。

「この会社の……、警備、担当を……、呼んでくれ……」

二人の受付嬢は困惑したようにお互いの目を合わせた後、少々お待ちくださいと告げて社内回線の受話器を取つたが、すぐに顔を上げると申し訳なさそうに男に聞いた。

「あの、失礼ですが、お名前を伺つてよろしいでしょうか」

受付嬢にしてみれば当然の対応だったが、一刻を争う事態だと知っている男にしてみれば、その笑顔でコーティングされた事務的な対応がいらだちを覚えさせた。

「緊急の要件なんだ！ とにかく……、早いところ担当者を、……呼ぶんだ！」

ほど走つてな！　そこをどけ！　直接警備室に話をしに行く！」

強引に進もうとする男を警備員は腕をつかんで引き止めた。

「お待ちください。すぐに担当が来ますので落ちついてください」

「貴様！　緊急だということがわからんのか！　貴様のせいでこの会社が滅茶苦茶になつても知らんぞ！」

いよいよ自制が効かなくなつた男は、警備員を突き飛ばすように腕を伸ばしたが、体格に勝る警備員はそれを意にも介さないように受け止めると、さらに嚴重に男を制止した。その時、担当らしき男が警備員を一人引き連れてようやくやってきた。

「一体どうしたつて言うんだ？」

その担当者は男を引き止める警備員に向つて訊ねたのだが、頭に血が上つている男は自分に言われたと勘違いしてさらに腹を立てた。「どうしただあ！？　あんたが担当者か？　いつまで待たせる気だ、本当に一刻を争うんだぞ！」

男のあまりの激昂ぶりに担当者は面食らつたが、サラリーマンらしくそれに対応した。

「まあまあ、落ちついてください。私が担当者です。お待たせして申し訳ありませんでした。今日はいろいろあつて少しばかり立て込んでいます。では、ご用件を伺いしましょう。そちらにお座りください」

押し問答

.....

着席を促す担当者の言葉を無視して、男は堰を切つたように話し出した。

「いいか？　時間がないから本題に入るぞ。この会社はある男に狙われている。以前、この会社に勤めていたことのある男からだ。そしてその男は、さっきの地下鉄爆破の実行犯だ。すぐに対策を取ら

ないと、この会社で何らかの悲劇が起こる。また大勢の人間が被害にあってしまうかもしれないんだ！」

担当者は呆けた様な表情を浮かべて聞いていたが、やはり冷静に聞き返した。

「はあ……。大変深刻なお話ですが、そもそもどうしてそんなことがわかるんですか？ 地下鉄の事故は当然知っていますが、まだ何も発表されていないはずですよ。あなたの言うようにテロなのか、それとも何かの事故なのか、誰もわかっていないのですよ？ そして、その地下鉄の事故と当社がなぜ繋がるのかがよくわからないのです」

担当者の当然の疑問に、男は努めて冷静に答えた。

「確かにわけがわからないだろう。だがそれは真実なんだ。以前、経理の社員が不正経理でクビになったことがあったはずだ。その男がこの会社を恨んで復讐しようとしている。人事に聞けばその男の存在がわかるはずだ。これは冗談などではない、確実に迫ってる危機なんだ」

男の真剣な説明ぶりに、担当者も冗談やいたずらだとは思わなかったが、それを素直に信じられるかというところはいかなかった。

「真実と言われましても……。あなたの話を信じるに足る証拠のようなものはあるのですか？ 私共も憶測だけで動くわけにはまいりませんので……」

要領を得ないといった感じの担当者の対応に、男はイラつきを覚えた。しかし同時に、さっきまでの自分と重なるような気がした。何も知らない者からすれば、何もかも知っている者の言葉はすぐには理解できないものだ。だが、そうですねかと引くわけにはいかなかった。

「証拠？ 俺はつい数十分前にその犯人と話をしたんだ。ほら、この携帯でだ。その男は非常に執念深い奴だ。何の関係もない人間を自分の復讐の為に犠牲にすることなど何とも思わないような非情さも持ってる。証拠がどうだとか言ってる間に犯行が行われたらどう

するんだ？」

「犯人と話した……？ よくわかりませんね。あなたはその犯人と知り合いなのですか？ 何故そんな危険な人物を知っていて今まで放置してきたんです？」

「違う！ その男とは今朝、さつき初めて話したんだ。俺も事件に巻き込まれた一人なんだよ！ そこらへんの経緯は省略するが、とにかく、あいつは本気なんだ、本気で復讐を果たそうとしてるんだ！」

「なるほど……。それで、その復讐とやらはこの会社の誰に、いつどのような形で遂行されるのですか？ このビルごと破壊されたりするんですか？」

担当者の質問に男は即答することができなかった。電話の男の話をもとにこの会社が復讐対象だと推理して駆けつけたものの、どのような復讐がされるのかまでは考えていなかったからだ。

「それはわからない……。ただ、あいつと話して俺はあいつの次の行動がわかったんだ。具体的な目標や正確な時間まではわからないが、すぐにでも犯行が行われる可能性が高い。この会社がターゲットに間違いないんだ！」

必死な男とは対照的に、警備担当者はこれまで困惑した表情を保っていたが、ここにきて担当者側にもイラつきがにじみ始めた。

「……、何とも言えませんな。ただ漠然とこの会社が危ないと言われましても、あなたの話には具体的なものが何一つないじゃないですか。私も他の仕事を置いてきてるんです。例の地下鉄事故の影響の確認や役員会議のセッティングやらで忙しいんですよ。」

担当者のイラつきを感じ取った男は、善意を踏みにじられた気がして、とっさに大きな声で憤りをぶつけた。

「忙しいだと！？ あんたの仕事は警備だろうが！ 最も重大な危険が迫ってるのになんだその言い草は！ 俺の話が信じられないって言うんなら、人事担当を呼べ！ 帳簿操作の責任を押し付けられて首を切られた男の記録が残ってるはずだ。痴漢で逮捕されたのを

利用してな！」

いきなり”帳簿操作”や”痴漢”などのいかがわしい言葉が大音量で飛び出して、担当者は思わず男に詰め寄った。

「ちょ、ちよっと、何てこと言い出すんですか！ 場所をわきまえてくださいよ！」

「それが事実なんだから仕方ないだろう？ とにかく人事担当を……」

いきり立つ男の発言を遮るように警備担当者は話の収束を図った。「とにかく！ とにかく話はわかりました。警察の協力も仰いで、社内の警戒レベルを上げて事に当たります。その男に関しても人事に聞いて調べてみますよ。ご協力ありがとうございます。後のことは内部の者にお任せください。では、お引取りを」

担当者は一気にそう言い切ると、二人の警備員に対して顎で合図した。男はすぐに両脇を抱えられ、外に連れ出されそうになった。

対面

「おい、放せ！ 本当にやる気があるのか？ 人事の人間と話をさせるー！」

何とか拘束を逃れようとする男だったが、二人がかりの警備員を振り払えるわけもなく、ずるずると引きずられるように近くのバス停まで連れてこられた。自らの仕事を全うしたと判断した警備員たちは、男を放すと失礼しますと一言残して社内へ戻りはじめた。

「こ、この……、邪険に扱いやがって。どうなっても知らんぞ！」
男の叫びを背に引き上げる警備員らだったが、何故か片方だけが立ち止まり、男の元に戻ってきた。男は少しばかりたじろいだだが、ぎこちなく胸を張ると警備員を睨んだ。

その警備員は社内で押し合った若者ではなく、警備担当者とともに

にやってきた方だった。若者と呼ぶにはいささか臺が立ったその顔つきと、自分よりも細身の体格を確認して、男は少々強気に相対した。

「なんだ？ 文句でもありそうな顔だな。あんたのところの会社は、親切で危機を知らせに来た者にこんな態度しかとれないのか？」

顔を真っ赤にして苦情を訴える男を、警備員は冷たい目で見返していた。男も負けずに睨み返したが、警備員の不気味なほど大きな瞳とどこか不自然な顔つきを見て、男はまたしてもたじろぐことになった。

「な、なんだって言うんだ・・・？」

「こうして向き合ってみれば、絶望するほどたいしたもんじゃないな……」

低く抑えるようにそう呟いた警備員を、男は目を見開いて凝視した。間違いなく、ほんの数十分前に自分の心を切り刻んだ低い声だった。

「お、お前、電話の……！」

それまで無表情だった警備員だったが、男の驚く様を見ると、大きな目をわずかに細めて唇を吊り上げた。どうやら笑ったようだった。

「もう一度話せるとは思わなかったよ」

言伝

.....

男は警備員の正体に気付いた。自らを待っていた普通の未来も、地道に歩んできたこれまでの過去も、完膚なきまでに叩き壊した憎い相手が目の前にいる。それにも関わらず、男はただ目を見開いて警備員姿の仇敵を見ることしかできなかった。

「どうした部長さん？ あんたの正義感はどう潰えたのか？」

やはり不自然な顔をしてぼそぼそと呟く警備員に対して、男はかろろじて言葉を搾り出した。

「想像していた顔とずいぶん違うな。声を聞くまでわからなかった。まさか、お前に会えるとはな」

警備員は表情を変えないまま鼻で笑った。

「想像と顔が違うのはむしろ当然だろう。俺が警備員としてあの会社に入り込んでいられる理由を考えればな」

「なるほど、整形か。それでその不自然なほど大きな目と強張ったような表情をしてるんだな。それも計画のうちって訳か」

警備員は制帽を深くかぶり直した。無意識のうちに顔を隠したい気持ちが現れたようだった。そして、口だけを覗かせて言葉を発した。

「あなたには関係のない話だと言ったはずだ。わざわざここまで走ってきたらしいが、よっぽど巻き込まれるのが好きらしいな」

「おまえを止める義務があると俺も言ったはずだ。そして、ここにたどり着いた。俺がここまで来たことで、おまえの計画は狂いだしてるはずだ。もう、おまえの好きなようにはやらせん！」

男の言葉を聞いて、片方だけ釣り上がっていた警備員の唇が、両端とも釣り上がった。その様は不自然さを通り過ぎて不気味そのものだった。口角はそのままに、警備員は口を開いた。

「確かに狂いだしてる。しかし、どうやらそれは事態を面白くしているようだ」

次の瞬間、警備員は男の鼻先に小さなスプレーを突きつけ、勢いよく吹きつけた。瞬時に遠のく意識の片隅で、男は低い声を聞いたような気がした。

(……じゃあな。次に目を覚ます時、変った音色の目覚ましを聞くだろう……)

そのまま、男は気を失った。崩れ落ちた男を警備員は無表情で見下ろした。

目覚まし

男は爆発音と共に目覚めた。驚いて飛び起きた男の目に飛び込んで来たものは、道路を挟んだ向い側の歩道に雨のように降り注ぐ大量のガラス片だった。ガラスが地面にぶつかるとヒステリックな音がしばらく続いた後、四方から同じくヒステリックな悲鳴が聞こえてきた。男は、さきほど追い出された会社を正面から見ると、場所に寝かされていたのに気付いた。顔を上げると、ビルの最上階あたりから煙が吐き出されているのが見えた。

役員会議のセッティングやらで忙しいんですよ

警備担当者が思わず口にした言葉が男の頭をよぎった。黒い煙が空に昇っていく様子を呆然と見上げながら、男はもう一つの復讐が果たされたことを確信した。そして、自分の行動が全て無為に終わったことを知った。

麻酔と疲労が残るためにふらつきながらどうにか立ち上がった男は、混乱を見せ始めたその場を後にした。とぼとぼと歩きながら、男は今日起こったことを思い返していた。時間を確認するために左腕を見た男は、自分が涙を流していることに気付いた。気付いた後、男は声を出して泣き始めた。様々な感情が制御できずに、ただとぼとぼと歩きながら子供のように泣き続けた。

帰宅の後

結局、男は自宅まで歩いて帰ってきた。時刻は午後の一時を過ぎたころだった。玄関のドアを開けると男の妻が出迎えた。その際、妻が夫にかけた言葉は、「あら」だけだった。男はそのままシャワ

ーを浴び、テレビに見入った。普段は一部の局でワイドショーをやっている時間だが、今日はどの局も緊急速報という形で特別番組を放送していた。当然、地下鉄爆発事故と会社ビル爆破事件を報道するためだ。報道ヘリコプターの空撮映像は男が朝に目撃した現場を映していたが、その被害は男の印象よりもはるかに大規模なものだった。画面の隅には「テロか!? ラッシュの地下鉄と上場企業ビル、謎の連続爆破!」とのスーパーが躍っていた。事故の目撃者や死を免れた被害者などのインタビューが続き、時間とともに、死者や行方不明者の数が増え続けた。食事も摂らず、会社からの電話にも出ず、帰宅してからずっとテレビを見続ける夫の横で、妻は能面のような表情で掃除機をかけていた。小学校から帰ってきた息子が珍しく早く帰宅している父親に驚いたが、関わらせないかのように妻が別室へと手を引いていった。

時間は過ぎ、ゴールデンタイムと呼ばれる時間がきても通常放送には戻らなかった。夜の闇を押しつけるように無数の照明が現場を照らして、いつ終るとも知れない救助を続ける作業員の様子が放送され続けた。被害者の数は確定している死者だけで百人を超えた。男はそれまで増加が止まらない被害者数を沈鬱な気持ちで受け止めていたが、三桁を超えたところで逃げ出したい衝動に駆られた。俺は関係ない、俺の責任ではないと心の中で繰り返し唱えていた。結局テレビの前を動くことなく深夜を迎えた。家族は男が気付かない間に眠ったようだった。

その時間になると、ビル爆破の情報も次第に明らかになってきた。ビルの最上階にある会議室が爆破され、社長や役員ら十三名が死亡したということだった。しかし、確認された役員会議の出席者数は十二名で、もう一人の犠牲者は誰なのか不明なままだった。

深夜を過ぎ朝を迎えるころになって、ある局が新たな情報が取り上げた。ビル爆破の犯行予告が、事件当日の朝に匿名掲示板に書き込まれていたというものだった。その書き込まれた内容は、「今日の正午、株式会社　の役員全員を殺す」というもので、添えられ

ていたURLのホームページには、その会社の数年前の会計記録が詳細に記されていた。コンピュータに詳しいというコメントターが、書き込みやホームページを解析すれば関係者に辿り着くことが可能だとして顔で説明していた。すでに掲示板の書き込みは消去されリンクされたホームページも閲覧できなくなっていたが、男はそれが電話の男が残したメッセージに間違いないと確信した。そして、会議室の十三人目の被害者は電話の男なのではないかと思った。閉められたカーテンの隙間から朝日が入り込むと、急に男はのが渴いている事に気付いた。キッチンへ行き冷蔵庫から缶ビールを取り出すと、その場で一気に飲み干した。もう一本取り出してリビングに戻る途中、膝の力が抜けるような感覚を覚えてあわてて壁に身体をあずけた。男は憔悴しきっていた。なんとかソファアへ戻ると、急激な睡魔を抑えることができずにそのまま眠りについた。

苦しみ

誰かの話し声が聞こえて男は目を覚ました。薄目を開いてみると、どうやら妻と息子が話しているようだった。

「どうしてお父さん家にいるの？」

「どうしてだろうね。もう夕方なのに全然起きないの。仕方ないお父さんね」

男はその会話で、すでに夕方なのだと気付いた。やはり違う部屋へ向う妻と息子の足音を感じながら男はようやく身体を起こし、またテレビをつけた。死者の数を伝えるテロップは225と記されていた。

これまで、電話の男が言っていた「苦しみ」というものが、男には理解できていなかった。単純に、大勢の人間を巻き込んでしまった罪悪感、ぐらいに受け止めていたのだ。しかし、報道を見続ける

ことでその認識が甘いことに気付いた。増える人数よりも男を苦しめたのは、続々と紹介される生前の被害者を語るVTRだった。

来月に結婚式を控え衣装合わせに向っていた二十三歳女性、その日を最後に定年退職することが決まっていた六十五歳男性、非番だったにも関わらず救助活動を続けガス中毒で倒れた駅職員三十一歳男性、家族の期待を一身に受け先週来日したばかりの留学生二十歳男性、類まれな身体能力で将来を嘱望されていた水泳強化選手十五歳女性、家族から海外旅行をプレゼントされ空港へ向っていた老夫婦七十七歳男性と七十一歳女性、不妊治療の末ようやく身籠ることができた四十歳女性……。

次から次に紹介される悲劇は、そのことごとくが男を容赦なく責め立てた。死んでいった全ての者には、当然だが、これまでに歩んできた人生がある。短く編集された一人当たりのVTRでさえ、それぞれの人生の端々を垣間見せた。ワイドショーのスタジオに設けられたパネルには、被害者の写真がずらりと並んでいる。そのほとんどは笑顔で男を睨んでいた。人の人生を奪うという行為に関わったことが、これほどまでに自らを苛めるのか……。自らの行動が、これほどまでに不幸を呼ぶのか……。男は改めて何故こんなことになってしまったのか、繰り返し自問自答していた。

死者の人生に押しつぶされそうな現状を、電話の男はシミュレートしていたに違いない。そして、もう電話の男は生きていない。生きて報道を見ることになれば、自らも苦しむことを知っていたのではないだろうか。だから、全ての苦しみを俺に押し付けてさつさと死んでいったのではないか。死の瞬間、あいつはどんな顔をして死んでいったのだろうか。復讐の祝詞でも唱えて死んでいったのだろうか……。

男にはもう知る術はなかったが、その死の瞬間を何故か価値あるもののように感じた。そして、今はこの世にいない電話の男をうらやましく思った。

冷たい夜

夜になると、テレビの前を動かさない男を差し置いて、妻と息子は二人だけで食事を摂り始めた。父親のことをこれまで気にかけていた息子も、触れてはいけなくても思っただのか、視線もくれずに黙々とハンバーグを口に運んでいる。乗せられたチーズが糸を引き、それが小さな顎にこびりつくと、妻は眉をひそめてたしなめた。

食事を終え洗い物を済ませた妻は、男が座る三人掛けのソファの端に腰を下ろした。妻の方を見向きもしない男に対して妻は久しぶりに声をかけた。

「あなた、ずっと事故のニュース見てるけど、会社行かなくていいの？ 電話にも出てないみたいだけど……」

妻の質問に男は無言で答えた。それを予期していたように妻は続けた。

「返事しなくてもいいから聞いて。もう少ししてから話すつもりだったけど、今話すわね。……私達、別れたほうがいいと思うの」

妻からの別れの宣告に対しても、男は表情を変えずに、テレビを見続けるだけだった。男自身も自分の平静さが意外だった。既に電話の男から聞かされていたとはいえ、当の本人から離婚の意思を聞けばいくらか動揺してもよさそうなものなのに、さしたる感慨が持てなかった。あえて感情を表現するならば”どうでもいい”、それだけだった。そんな男の心情を知ってか知らずか、妻も淡々と話を続けた。

「あなたは何て思うかわからないけど、私の気持ちは決まってるわ。もう、こんな生活は耐えられないの。まだ、親権のこととか慰謝料の問題とか話さなきゃいけないことはいっぱいあるけど、とりあえず、今は私の気持ちをあなたに知ってほしくて。……これ」

妻は男の前に離婚届を差し出した。気のない目つきでそれを確認

した男は、署名や捺印が済まされていることに気付いた。一呼吸置いて妻は立ち上がり、リビングを出ようとした。男は引き止めることなくテレビを見続けている。妻は一瞬立ち止まり、事故の続報を伝えるニュース番組を見て一言呟いた。

「これ、あなたに似てるわね」

その一言を残して妻はリビングを出た。ニュースでは、”会議室爆破直前に現れた謎の男”が取り上げられていた。監視カメラの映像だというモノクロ画像には、激しく社員と言い争う壮年の男性が映っていた。

面白い事態

テレビで繰り返し流されているそのモノクロの映像は、間違いなく男の姿を映したものだ。いぶかしげに周りを囲む警備員二名と背広姿の社員を相手に、身振り手振りで何かを伝えようとしている。他の三名は終始落ちついて見えるのに、一人だけ狂ったかのようには手足をばたつかせているその様は、どう見ても不審者にしか見えない。自分であることも忘れ、男はこの映像の男性が滑稽に見える。昨日の出来事にも関わらず、はるか昔に見た夢の映像を見ているようで、現実感を得る事ができずに男は混乱した。

テレビは一旦コマーシャルに入り、お笑い芸人が出演するのんきなCMが流れた。ここで男はようやく事態を整理し始めた。

ニュースでは、この監視カメラに映った男が事件の鍵を握っていると確定的な報道がされていた。その根拠として、応対した警備担当者から地下鉄爆破のことについても語っていたと聞き出している。警察もこの映像の男を追っているという情報があったのだという。

映像の男、つまり俺は警察から重要参考人として目されているということだ。マスコミも総力を挙げて俺を探している。監視カメラの

解析などから、俺の素性が割れる可能性も十分にあるだろう。もし警察が俺のところまでたどり着いたとしたら。もしマスコミがこのマンションの前に殺到するような事態になったとしたら……

改めて、自分が置かれた状況を把握して、男は肩を震わせた。男の脳内では、ネガティブなイメージが次から次へと展開された。重要参考人というレッテルを貼られた以上、内情はどうあれ男を待っているのはマスコミによる容赦のないリンチだ。男にまつわる情報は全て茶飲み話として日本中に提供され、妻も息子も両親も、これまでの穏やかな生活を剥奪される。勝手な推測や想像でいつのまにか凶悪犯に仕立てられた男のイメージは世間の総意として定着するだろう。

電話の男を止めるため、新たな犠牲者を出さないための行動だったのに……。そう考えた時、男はある言葉を思い出した。

さらに深く犯罪に関わりたくてもいいのか？

確かに狂いだしてる。しかし、どうやらそれは事態を面白くしているようだ

電話の男が呟いた言葉だった。頼まれてもいないのに電話の男を追ってあの会社まで駆けつけた。その結果が世間で犯人扱いされているこの現状だ。またしても電話の男の言葉が現実となったことで、男は怒りを通り越して特殊な感情を持つに至った。全て電話の男の予想通り事が進むのならば、いつそ身を任せてみればいいのではないか……。そんな危険な感情に支配された男は、自宅からフラフラとした足取りで外に出た。

何もない

外に出ると、男はあてもなく歩き始めた。時間はまだ夜の八時過ぎ、人も車もまだまだ多い。帰宅途中のサラリーマンや夜の街に繰

り出そうとしている若者とすれ違つたたびに、男は不安な気持ちに包まれた。誰もが自分のことを見ているような気がして仕方がなかった。とりあえず外に出たものの、そんな追い詰められたような気持ちに耐え切れずに、男はなるべく人がいない方向へと走りだした。

何かに追われるように走り続けた男は、数分後近くの港にたどり着いた。辺りを見渡して誰もいないことを確認すると、男はようやく足を止めて両膝に手をついた。吐き出す息が淡く白く広がる様子を見ながら、男はあの時の報われなかつた疲労感を思い出した。

人知れず罪の意識に苛まれる日々を送る予定のはずが、現実的に重要参考人として追われる身となつてしまった。いずれ身元が割れ逮捕された時、果たして警察は自分の言葉を信じてくれるだろうか。いや、仮に信じてくれたとしても、もう普通の人生は送れないだろう。現時点で離婚する気である妻は息子を連れて出て行くはずで、リストラされる予定ならばこれまでのように仕事に打ち込むこともできない。罪が無いことがわかつたとしても、ひとたび罪人として吊るし挙げられたとなれば世間からの好奇の眼は避けられない。何もない……。すぐる物も誇る物も守る物も、何もない。あの時、携帯を拾わなければ、あの時、携帯の電源を入れようなどと思わなければ、……………携帯？

消化されることがない後悔を嗚咽と共に繰り返していた男は、携帯のことを思い出した。

葛藤と覚悟

男が履いているスウェットのポケットには、あの時拾つた携帯がしまわれている。帰ってから捨てることができずに、肌身離さず隠していたそれをゆっくりと取り出すと、男は改めて何の変哲も無いその携帯電話をまじまじと注視した。

電話の男が残したヒント、ただの勘違いかもしれないが、あの瞬間邂逅の証にも思えたあの時の言葉を男は覚えていた。

ただ、どうしてもその苦しみから逃れたければ、その携帯を調べてみるといい。脱出するきっかけを見つけることができるかもしれない。

自分の全てを破壊した相手の言葉でも、今の男にしてみれば唯一すぎるができる対象だった。”脱出するきっかけ”というあいまいな言葉が、男には神の御手のように感じられた。

脱出への鍵であるその携帯を男は両手で抱えるように持ち、恐る恐る観察した。二つ折りにされたその外観にはやはりなんの特徴もない。意を決した男は、ゆっくりと携帯を開いた。

「あれ？」

携帯を開いてみて、男はあることに気付いた。電話の男との通話を終えた後、確かに男は携帯をたたんでズボンのポケットにしまったが、電源を切った覚えはなかった。しかし、携帯の液晶は黒く染まっただけで、間違いなく電源は入っていない。勝手に電源が切れているという状況が、次なる行動を執拗に促した。

「また……、また電源を入れるっていうのか？」

拾った携帯電話の電源を入れることからこの悲劇は始まった。男にとつて電源を入れるということは、悪夢のリプレイ、そのスイッチ以外ありえなかった。それから数分間、男はその格好のまま携帯電話を見続けることしかできなかった。

電源を入れればまたろくでもないことが起こる気がする。しかし、今は電話の男のヒントが欲しい。携帯を調べる以外に何も手がかりがない状況で、今さら引き返すことはできない。電話の男の行動は決して許されないものだが、その言葉に偽りはなかった。この状況から逃れる為には奴の言葉を信じるしかない。やるんだ……、電源を入れるんだ！

覚悟を決めた男は両手で携帯を支え、震える指で電源ボタンを押した。

黒いだけだった携帯のディスプレイが発光とともに白く浮かび上がった。しかし、変化はそれだけだった。おっかなびっくりだった男も拍子抜けしたように肩を落とした。

「なんだ、ただ白いだけでアンテナマークすら出ない。……ん？…
…なんだこれは」

白いだけのように思えたディスプレイの右上に小さな黒点が並んでいることに男は気付いた。顔を近づけて見てみるとディスプレイに直接書かれた小さな文字列だと確認できた。画面が白くなることで浮かび上がったのだろう。男は目を細めてその文字を読んだ。

「ええつと、……自由へ……ようこそ………？」

自由

ある救急病院に変わった怪我人が運び込まれた。顔面と両手を激しく負傷している男性のだが、身元がわかるような物を一切持っていないかった。港で釣りをしていた人が小さな破裂音を聞いて発見したのだという。どうしたらこのような怪我を負ったのか、担当した医者も首を傾げた。幸い命に関わるような怪我ではなかったが、長期の入院は必要だった。身元がわからないため、病院側も困惑したが、放り出す訳にもいかず処置に困ることになった。なんとか身元を聞き出そうとするが返事はなく、ただ荒い息を繰り返すだけだった。数週間後も謎の患者はその病院のベッドの上にいた。怪我の方はなんとか快方へ向い容態も安定していたが、今だに口は開いていなかった。

包帯を取り替えるため看護師がその患者の元へやってきた。まだ血のにじむ右手の包帯を解きながら、看護師は男に呼びかけた。

「患者さん！ 患者さん！ 聞こえますか！？ 患者さん！」
名前がわからないためにその患者は、ただ「患者さん」と呼ばれ

ていた。相変わらず呼吸しているだけの患者を確認すると、看護師は顔の包帯を取り替えようと患者の頭に手をかけた。その時、カサカサに乾燥した唇がわずかに動いた気がして、看護師はあわててもう一度呼びかけた。

「患者さん！ 何ですか！？ 患者さん！ わかりますか！？ 患者さん！？」

謎の患者の唇からは小さな声が漏れていた。看護師は耳を近づけて立ち消えそうなその声を聞きとろうとした。そして看護師は男の口からなんと皮肉な言葉を聞いた。

「……俺……は、……自由……だ……」

謎の患者はそれ以来まったく喋らず、何年もその病院に居続けた。包帯も取れ傷も癒えたが、顔面の損傷は激しく、人相は人のものにとどめていなかった。両手の損傷も同様だった。相変わらず身元はわからず終いだったが、「患者さん」だった呼称は「自由さん」へと変更されていた。

(後書き)

いつもの生活が一変する恐怖を想像してみました。また、善も悪もない、混沌とする人間描写を心がけました。終ってみれば、誰一人いい人間がいない、後味の悪いものになってしまったのが、ちょっと複雑です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2573d/>

自由への誘い

2011年10月4日05時16分発行